



VOL. 7 NO. 4 The University of the Ryukyus Library Bulletin 1974. 6. 1.

引用文献・参考文献リスト作成法 (1)

1. はじめに

本学の学生諸君のクラブ誌や教官の紀要類を見て感じることは引用文献・参考文献の記載方法が各人各様になされていて、不平等であることに気がつく。もっとも現在のところ、この記載方法については国内でも統一的な規則はなく、各団体、学会などで、それぞれの刊行物において準拠する記入原則を個別にとり決めているのが現状のようである。ところが学内の現状は、一部の紀要を除いては、同一刊行物内の個別のと決めもなされず、学生のクラブ誌に対しても何らの指導も行なわれていないような気がする。そのことはクラブ誌を見れば一目瞭然である。

引用文献・参考文献の記載方法において、外国では雑誌または学会によりとり決めが行なわれている。(例えばThe Committee on Form and Style of the Conference of Biological Editors. Style Manual for Biological Journals. 2ded. 邦訳：医学・生物学論文のまとめ方のコツ。久保田競, 中村嘉男共訳。協同医書出版社, 1969. 131p. を参照)

ここで大切なことは、記載方法の統一である。同一の論文の中では同一の記載方法を最後まで保つべきである。例えば学内の紀要やクラブ誌を例にとると、著者名の記載方法がまちまちで、あるものは姓名ともに書いてあるのに、あるものは姓だけが書いてあったり、またあるものは書名(標題)が最初にきて著者が続

いたり、その逆であったりして不等一である。

先にも述べたように、わが国における標準規格の制定はまだ実現していないが、国際間では各国の国家規格間の相異をなるべく減らす目的で、国際標準化機構（ISO=International Organization for Standardization）が既に作られている。（1）

ともあれ、記載方法において最低限度の書誌的事項を具備しておれば、細かい点を除けば大同小異であるが、本学の現状はその書誌的データさえ満足に記載されていないものが多い。投稿規程などで記載方法の個別的なとり決めを急ぐべきではなかろうか。

さて学生諸君は在学中に、少なくとも30点以上のレポートと4年次には卒業論文の作成も手がけるはずである。その時に以下の記事がお役にたてば幸である。

2. 引用文献・参考文献とは

引用文献とは、論文を書くときに参照した文献の中で実際に引用したものを列記したものであり、参考文献とは、ある対象を研究し調査するのに必要と思われる文献を比較的広汎に取り上げたものである。（2） 例えば諸君が伊波普猷について論文を作成する場合、すでに書かれたいろいろなものを参照するであろうが、そのすべてを引用するとは限らない。ところが将来伊波普猷を研究する人は今まで出ている文献に何かあるかを知りたいと思うであろう。もし論者が伊波普猷について調べる過程の中で目に触れた文献をたとえ自分の著述に実際に利用しなくても、リストしておけば後の人に役に立つ。これが参考文献である。

以上からもわかるように、引用文献・参考文献リストの作成は非常に重要な価値をもっているといえる。

引用文献を明示する理由は「既知の事実・知識について（は）その出どころを読者に明瞭に示すために文献を引用し、読者がそれをたどることによって論文に示すことが客観的に実証できるようにするため」（3）である。またそれは「自分の論文になにかのかたちで利用されたものの証拠を具体的に示すのばかりが目的ではない。他の研究者が直接に文献を読むときの便宜のことも考えなければならない。あとの場合を考えに入れていくかどうかで、文献の引用の心がまえにかなりの差ができるものである」（4）

このように、引用文献・参考文献リストの作成は論文作法において極めて重要な位置を占めているといわねばならない。にもかかわらずそれが等閑視されているのはどうしたことだろうか。

3. 引用文献・参考文献の記載法

文献記載法はなるべく簡単に表示する必要がある。しかしあまり簡単にすると読者が判読に苦しみ、文献を捜し出すことが困難になるので両方の事情を考慮して適当な約束を設ける。これが文献の記載法あるいは書誌データの表現法とよばれるものである

が(5)、現状では専門分野により、団体によりある程度まちまちであることは前に述べたとおりである。

ここでは図書館学の立場から、日本目録規則およびA. L. A. の目録規則を参考に、だいたいそれに準拠して作明していくことにする。

A. 図書（単行本）の表示

著者名または編者名
書名
版次
出版地
出版者
出版年
頁数

「例」

桜井雅夫. ラテン・アメリカ経済研究事情. アジア経済研究所, 1962. P. 78~85.

(参考文献の記載法のときはページ数を200P. のように記せばよい) ※

Alexander, Carter and Burk, A. J. 教育資料の検索と活用
大佐三四五等訳. 山本書店, 1961. P. 215~9.

Butler, Pierce, ed. The reference function of the library. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1943. P. 5.

※ (200P. は総ページ数が200であることを示し、
P. 78~85は78から85ページの部分を引用した
ことを示す。)

B. 雑誌（逐次刊行物）の表示

筆者名
標題
誌名 (論文記載資料名)
巻, 号
年, 月
引用したページ

「例」

森村正直。“磁気格子の研究”,計測と制御,2:7. 1963. 7;
P. 24.

Overmyer, La Vahn. "An analysis of output costs and
procedures for an operational searching service",
American documentation, 14: 2. Apr. 1963. P. 137.

(上記の例で2:7は2巻7号を,14:2. Apr. 1963. は
14巻2号,1963年4月発行を示す。)

C. 各表示要素の記載法

1) 編著者が単独の場合

姓,名の順で記載する。なお編者には和文資料の場合は「
編」,欧文資料の場合はed. あるいはcomp. を付記する。
団体による編著書は団体名をあける。

なお著者の姓名は、特に外国人については、出来るだけ
くわしく書いた方がいいと主張する人もいる。(6) (7)

「例」

紀田順一郎。読書の整理学。竹内書店,1972. 279P.

小田泰正編。レファレンス・ワーク。日本図書館協会,
1966. 236P.

Von Wright, George Henric. The logic of preference.
Edinburgh, Edinburgh Univ. Press, 1963. 250P.

Butler, Pierce, ed. The reference function of the
library. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1943. 366P.

2) 編著者が2名の場合

2名を、和文資料の場合はコンマで、欧文資料の場合は
andで連記する。

「例」

石母田正,松島栄一。日本史概説I。岩波書店,1972. 422P.

信夫清三郎,中山治一編。日露戦争史の研究。河出書房新社,
1972. 521P.

Zetler, Robert L. and Crouch, W. G. Successful communi-
cation in science and industry. New York, McGraw-
Hill, 1961. 290P.

以下次号へつづく

(参考調査係・仲西盛秀)

1. 図 書

「図書＝書物とは形態的には、自然のままのまたは加工した適当な物質的材料を選び、その面の上へ文字や図様を筆写または印刷したものを有機的に配列し、保存または運搬に適するよう、その材料が要求する方法でひとまとめにしたものをいう」。学問的な言い方をすると読むのも面倒くさい定義になるが、とにかく一般には印刷物を綴ったもので代表される。図書館員にとっての「図書」はこの定義でかたづくが、「図書」という字そのものにはもっと他の意味がある。それは朝鮮の季朝時代、朝鮮国王が日本との外交文書に押した銅印のことである。この制度は倭寇の被害に困った朝鮮が統制貿易の方法として用いたものであるが、図書の贈給は1418年（応永25）を初見とし、九州、対島、豊岐、肥前、肥後、石見にまであったという。受図書人はおおむね毎年朝鮮と貿易することが許されていた。このため図書は一種の貿易権となり、その多くは後には対馬人が所有するようになったと言われている。

2. 索引と牽引

索引を「ケンイン」と読む人に出会うことがある。牽引と字が似ていることと、両方に引の字がくっついているので、まぎらわしいためであろう。索は「つな、なわ、さがす、もとむ、たずねる」という意味があり、牽は「ひく、つらなる」の意味がある。しかし索にも辞典をひく（辞典でさがす）という読みかたがあり意味の上でもまぎらわしい。牽引という言葉は外科や整形外科病院などで良く耳にするが、牽引療法の意味で、骨折や関節疾患、骨格整形等に用いる療法である。

近時の索引法の進歩は、図書館学や書誌学関係の事（辞）典類の索引の定義が、索いた者に食い足りなさを感じさせる程になっている。例えばKWOC (Keyword out context) index やKWIC (keyword in context) index のようなものについては、説明不足言い足りなさを感じさせる。またB. A. (Biological Abstract) のBiosystematic Indexのように生物の分類学的カテゴリーで抄録を索引するものや、C. A. (Chemical Abstract) の多種の索引は、一般的な索引法だけを学んだだけでは充分に使いこなせない。生物学分類や化学についての相当高い知識を必要とする。学問の進歩によるこのような索引の多様化は、図書館員の質の高度化を要求してやまないものといえよう。

(参考調査係・山田 勉)

図 書 館 事 情

1. 閲覧規程の一部改正

閲覧規程の一部が、図書館運営委員会及び部局長会議の議決にもとづいて、下記のとおり改正され6月1日から実施された。

改正の条文

第3条 図書館の開館時刻は、9時とする。

- 2 図書館の閉館時刻は、平日は21時、土曜日は16時とする。ただし休暇中にあつては、平日は17時、土曜日は12時30分とする。

改正の理由

1. これまでの開館時刻8時30分は、閲覧業務の処理及び読書学習環境をととのえるための準備業務に支障がある。
2. 休暇中における閉館時刻を延長したのは、主として利用サービスを強化するため。

2. 館内人事

退職：池原幸子（昭和48年12月31日付）

異同：知念 栄（事務局文書課主任事務官へ、昭和49年5月1日付）

浜川 暁（法文学部会計係へ、昭和49年5月16日付）

正職員へ昇格：

上間真理子（昭和49年2月16日付）

宮城 豊（昭和49年5月16日付）

比嘉 進（昭和49年5月16日付）

新採用：松原敏夫、（昭和49年4月1日付）

大峰紀子（昭和49年4月1日付）

館内人事異同が5月20日付で実施され、各係は次の職員構成となった。（係長は6月1日付）

受入管理係

宮島恵広（係長）

松島寛正

崎浜文枝

豊平朝美

安 学

喜久川政信

下地 隆

大峰紀子（新採用）

宮城 豊（新採用）

比嘉 進（新採用）

名幸ツル

整理係

新井裕文（係長）

友利考一

金城照子

岸本約子

上間真理子（新採用）

松原敏夫 (新採用) 参考調査係
柵原初子 (閲覧係から) 山田 勉 (係長・保健学部
図書室係長から)

●
閲覧係

新城安善 (係長)
山城篤博 (参考調査係から) 保健学部図書室
平 陽子 野原敏弘 (係長・参考調査係
長から)
池村恵光 (受入管理係から)
大城幸子 渡慶次安子
知念千代子 (整理係から) 下地順子

3. 図書館運営委員会、その他

第77回図書館運営委員会：4月17日 14：10～16：20

- 議題 1. 閲覧規程の一部改正について
2. 較差是正費の配分法の答申について
3. 保健学部図書室の建築について
4. 購入雑誌の選定について

報告事項

1. 図書館状況報告 (閲覧係、保健学部図書室)

全沖縄大学図書館協議会総会 (第3回)：4月27日 13：30～
15：30

館長、事務長第4回九州地区国立大学図書館協議会総会に出席
5月9日

館長、事務長第25回九州地区大学図書館協議会総会に出席：
5月10日

第78回図書館運営委員会：5月17日 13：10～15：00

- 議題 1. 昭和49年度較差是正費 (57,302千円) の配分方法に
ついて
2. 昭和49年度図書館運営費配分要求額について

報告事項

1. 図書館状況報告 (受入係、整理係、閲覧係、参考調
査係)
2. 昭和49年度購入二次資料の負担区分について

受入管理係 豊平朝美は名古屋商工会議所における専門図書館
協議会主催の昭和49年度全国研究集会に参加した。

5月9日～10日 研修内容：資料管理機械化の方向等

永楽大典（えいらくたいてん）

京都大学人文科学研究所から貴重書「永楽大典 卷六百六十五之六百六十六」の御寄贈が本学にあり、この度図書館に納められた。「永楽大典」とは「明代に編集された中国最大の類書。永楽帝の勅選、解縉、姚広孝らの編纂。22,877巻、11,095冊。1405（永楽3）年に着手して1408年完成。内容はそれまでのあらゆる典籍をあつめ原形のまま、あるいは分断して「洪武正韻」の韻の順序によって配列したものである。これまで儒仏道など単独のものしかなかったがこの大典は医占技芸などあらゆる分野の典籍を網らしている。アロー戦争、義和事変などのため大部分は焼失あるいは散逸し、現在ではわずか60余冊しか残っていない」（アジア歴史事典（平凡社）第1巻 P. 371）

「さてこの零本は原装で、卷六百六十五と卷六百六十六との二巻を一冊にしている。二巻とも一東韻の雄字に属し、卷六百六十五は南雄府の二、卷六百六十六は南雄府の三である。永楽大典目録によると、その前の卷六百六十四が南雄府の一、後の卷六百六十七が南雄府の四であるから、南雄府としては半分を存していることになる」（同書の解説より）

本冊の内容の中「太平寰宇記、輿地紀勝、方輿勝覽は現存するが、他はみな今日では散失した書物ばかりであり、・・・南雄路志のごときは、伝存の少ない元代地方志のきわめて貴重な資料といてよい。」（同所）

本冊は縦51cm、横30cmの俵入原寸大で「装釘、内容とも忠実な複製を期したが、表紙の題簽が欠けていたので、これだけは本文中の文字を撮影して適宜配置した」（同所）

以上、本冊はきわめて貴重な資料であり、原本は中国にもない模様である。

琉球大学附属図書館“びぶりお”第7巻4号 [通号27]

昭和49年6月1日 発行 編集兼発行人 平良 恵仁

沖縄県那覇市当蔵町3丁目1番地 電話34-0101（内333）